

## 安全科の授業における児童の「安全・安心」の様相の変容に関する研究

松井典夫 浅田正志 佐々木靖 藤田大輔

大阪教育大学附属池田小学校

### Research on transformation of aspect of child's "Safety and Security" in class of safety studies.

Norio MATSUI, Masashi ASADA, Yasushi SASAKI, Daisuke FUJITA

IKEDA Elementary School attached to OSAKA-Kyoiku University

#### 抄録

本校大阪教育大学附属池田小学校では、2009年度に、文部科学省の教育課程特例校の認定を受け、日本で初めてとなる「安全科」を設置した。その主たる目的は、安全教育の内容を系統的に整理、実践し、全学年において発達段階に応じた安全教育プログラムを構築することにある。本稿は、「安全科」の授業実践において、児童の「安全・安心」の様相がどのように変容するのかを、児童の言葉や行動から分析し、安全教育が及ぼしうる児童への影響について、実証的に述べ、安全教育の発展に寄与しようとするものである。

そこで、本研究においては、第5学年で実施した『命のバイスタンダー』の授業実践をもとに、傷病者に対する児童の意識が授業実践前と、一次救命処置のスキルを習得した実践後ではどのように変容するのかを、アンケートを実施、分析する方法をとった。

実践前は、人の命を助けたいという、道徳的倫理感が児童の意識を左右している様相が見られたが、一次救命処置のスキルを習得した実践後は、人の生命に触れることに対する畏れを児童は感じている様相が見られた。

このことにより、道徳的倫理感のみに支配されていた児童の意識が、スキルを習得することによって、命の重さに対する実感を持ち、より実感を持って「自分には何ができるのか」を考えることができるようになった。

キーワード：安全科 「安全・安心」 生命尊重 BLS教育

Key words : Safety studies , Safety and Security , Respect for life , Education of Basic Life Support

## I. はじめに

### 1) 「安全科」の設置にあたって

平成13年6月8日。本校、大阪教育大学附属池田小学校に1人の暴漢が侵入した。まだ幼く無力な1、2年生の児童8名の尊い命が奪われ、多数の重傷者出した凄惨極まりないその事件は、『学校安全神話』を根底から覆し、学校教育における安全学習の必要性を痛感させた。そして、私たち教職に携わる者に、尊い児童の命を守るといふ当たり前だったはずの教育理念を、もう一度強く意識する必要性を示唆した。以来本校では、児童が生涯にわたって安全・安心な人生を歩んでほしいという願いのもと、児童の危険予知・回避能力を育む安全マップの学習や安全スキルの学習を、全学年において進めてきた。

安全教育とは、命の教育である。危険を予知し、回避する能力が育まれる中で、自分の大切な命を自ら守ろうとする強い心が生まれ、自他の命を大切にしようとするやさしい心が育っていく。誰もが、「命は大切なものだ」と潜在的にはわかっている。しかし、命にはその実体がな

いだけに、実感することは容易ではない。その大切さに対する実感は、大人はもちろん、ましてや児童が容易に持ち得るものではない。したがって、実体のない命に対する実感は、家庭はもちろんのこと、教育活動の中で育んでいくべきものである。

しかしながら、社会の状況を鑑みたとき、児童が被害に会う事件・事故は引きも切らず、児童が安全・安心な学校生活を送るためには安全教育の必要性は高まる一方である。安全教育の一般化に向けての重要性が増す中、本校の取り組みにおいて、防犯カテゴリーのみならず、交通安全、災害安全、生活安全全般に安全教育のカテゴリーを広げて行おうとするとき、学校教育全体での教育課程の見直しが必要となった。そこで本校では、文部科学省による教育課程特例校の認定を受け、特別の教育課程として「安全科」を設置するに至った。

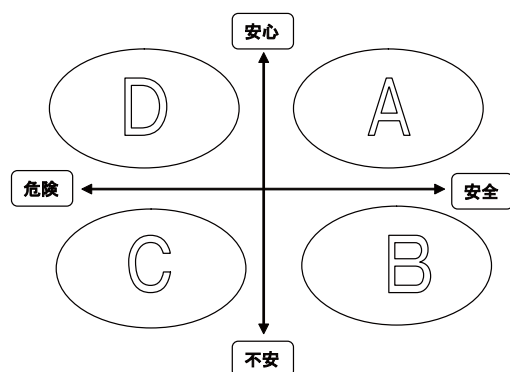
本校の安全教育は、「生命尊重」の考えを基盤とすることが大前提である。すべての人々が自他の生命を尊重することがなければ、「安全・安心」は成立するものではないからである。

しかし、これまでの一般的な安全教育の実情を考えたときに、低学年での交通安全教室や、防災に関する避難訓練が主だったものである。これらによって児童は、「安全」に行動するための知識を得て、その行動様式を知る。しかし、そこには交通安全や災害に対する実感はなく、また、命の大切さへの実感に結びついていないと考え難い。安全教育にとっての課題であり、肝要なこととして、「実体験することができない学習」であるということが挙げられる。交通事故の怖さ、地震や火災の怖さは、学習の中で実際に体験することはできない。だからこそ、実体験に近い実感を持たせる教材開発が肝要であり、実感を持たせることができる授業展開が必要となる。そして児童は命の尊さの実感に一步ずつ近づいていくのである。例えば、交通安全教室をそこで終わりにするのではなく、自他の生命の大切さの実感にまで教育目標を広げたとき、特別活動や生活科、総合的な学習の時間の中の安全教育では目標を達成していくことが困難であると感じた。「安全科」は、特別な教育課程として、本来行っていくべき安全教育の理想的な姿を求めて研究していくために、本校にとっては不可欠なものと言える。そしてその研究の成果から、多くの学校園において、本校が発信する安全教育の重要性を共有し、実践していくようになることを願ってやまない。

## 2) 安全教育における「安全・安心」とは

では、「安全・安心」を生み出すものは何か。児童の身の回りには、安全を守る多くのものが存在する。校舎の構造、警備員の存在、防犯ブザー等。しかしそれらは、安全を「守ってくれるもの」であり、そこばかりに期待しては、生涯にわたる本当の「安心」は得られないと考える。児童自身が自ら「安全・安心」を手に入れることができる能力を育むことが、学校での安全教育に課せられるべき命題である。

そこで、「安全」「安心」の関係性と児童の様相を以下の図でとらえたい。



＜図1 附属池田小学校「安全科」教育論 2010松井＞

安全教育で目指すべきところは、「安全で安心」である

Aの категорияである。しかし、このカテゴリーに児童の状態がいれば、安全教育の役割が達成されたかと言えばそうではない。たとえば、先に挙げた防犯ブザーの例で言うと、防犯ブザーの学習をする前なら、Aの位置にいた児童も多数いるだろう。「防犯ブザーはいざという時に、不審者を撃退することができる。それを持っていれば安心だ」と感じている状態である。しかし、学習を進めるうちに、実は持っているだけでは安全とは言えないことに気付き始める。児童は「安全を守るものだけど、それだけではだめだ。自分にはいざという時に使うことができない」というBの状態や、あるいは、「まったく安全とは言えない。頼るのはこわい」というCの状態へと移行し始める。このように、これまで何の疑問を持たずに「安心」しきっていた状態のAの位置では、児童の生涯にわたる「安全」「安心」とは言えない。まずは「真実」を知ることが、安全教育の大きな役割のひとつと言えるだろう。しかし、この学習をした時点で、児童はBやCの位置にとどまっているのではなく、ベクトルは再び、真の意味でのAに向かい始めているのである。

また、「危険なのに（もあるのに）安心している」Dの状態についてだが、たとえば児童の登下校がそこに当てはまる。大阪府警のデータによると、声かけ事案の時間帯は児童の下校時間帯(15時～17時)に圧倒的に多くなっている。<sup>1)</sup>しかし、児童は自分の下校経路に潜む危険について、常に考えながら下校しているわけではない。交通事故もそうだが、誰もが「今、自分の目の前にある危険」とは意識していない。そこで安全教育において、安全マップの授業をする。すると児童は、今まで気づいていなかった危険な箇所について見るようになる。その時点では、Dの位置からC（危険だし不安だ）の位置に移行する。しかし、そこで育まれた視点は、いかなる場所においても通ずる視点に育つ。そうして危険予知・回避能力が育まれていく児童のベクトルは、Aに向かっているとと言えるのである。

またその一方で、低学年においては、まわりの大人に支えられ、育まれている「安全」や「安心」を知ることによって、Aの位置にいた自分がより一層の広がりや深まりを見せる。そのことによって、自尊感情がより育まれることも大切であり、そこから高学年段階の、より真実の「安全」「安心」へと向かっていくことができるのである。

安全教育を行っていく中で大切なのは、現時点での児童の立場が、取り上げる題材にとってどの位置にあるのかを把握し、学習を進めていくことである。そして多くの場合、いったん児童がいた位置から、よくない方向に向かう状況が作り出される。このことは、児童の不安を

煽っているのではなく、今までは学習することなくいた立場（A～D）から、学習することによって、安全や危険、自分が抱いていた不安や安心に対して真の意味で自己認識し、生涯にわたって通ずる「安全」と「安心」を獲得していくのである。

### 3) 本研究の目的

本研究は、本校「安全科」の授業実践において、児童の「安全・安心」の様相がどのように変容するのかを、児童の言葉や行動から分析し、安全教育が及ぼしうる児童への影響について、実証的に述べ、安全教育の発展に寄与しようとするものである。

本研究においては、特に第5学年の実践『命のバイスタンダー』を例にあげて、児童がいかにして、命の大切さの実感へと近づいていくのかを述べたい。『命のバイスタンダー』の指導計画は、以下の通りである。

児童の活動と意識の流れ	指導上の留意点●
<p><b>第1次 一次救命処置（BLS）について知る（2h）</b></p> <p>○様々なデータや体験談から、現実起こっている状況（心臓停止状態）について考える。</p> <p>○BLSのよさについて知る。</p> <p>講習を受ければ、誰でも人の命を助けることができるんだ</p>	<p>●救命曲線のデータを使用することによって、実際の生命の危うさに気づかせ、その生命を助ける可能性を感じさせたい。</p> <p>●昨年のAEDの学習を思い起こさせながら、BLS全般の中のAEDであることを押さえさせる。</p>
<p><b>第2次 一次救命処置（BLS）について学び、体験する。（3h）</b></p> <p>○回復体位</p> <p>○気道確保</p> <p>○人工呼吸</p> <p>○胸部圧迫</p> <p>○AED</p> <p>○一連の流れ</p>	<p>●それぞれのスキルを学ぶにあたっては、マネキン、AEDトレーナー・口腔部の模型など、具体物を使用して学ばせる。</p> <p>●AEDについては前年度の復習になるが、1年経ってみてどうかという実感を持たせる。</p>
<p><b>第3次 バイスタンダーとしての役割を考える。（3h）</b></p> <p>○昨年のAEDの学習について、思い出し、振り返る。</p> <p>○実際にAEDを使った身近な人の話を聞く。</p> <p>○こんなとき、自分だったらどうする？</p> <p>○いのちの尊さについて考えよう。</p>	<p>●昨年はAEDのみを実際に体験したことを思い出し、今回はBLS全般であることを実感させる。</p> <p>●実際の体験談を聞くことにより、次時の自分自身の思考へと結びつける。</p> <p>●体験を通じた緊迫感を持たせ、バイスタンダーとしての認識を持たせる。</p>

## II. 研究方法

### 1) 実践概要

本実践『命のバイスタンダー』の大きな目標は、児童にBLSスキルを習得させることにあるが、Hidden curriculumに存するのは、「命の大切さの実感」である。児童がBLSスキルを習得し、将来、目の前に傷病者がいたとき、バイスタンダーとして人の命を救う社会的貢献を願うことが第一義にあるのではなく、BLSスキルを学ぶ中から、人の命に対する畏れを実感し、「自分が本当にできることは何か」ということを、実感を持って考えることができるようになってほしいというねらいがある。

児童は純粋であるがゆえに、目の前に傷病者がいたらどうしますかと問うと、大半が「助ける」と答えるだろう。そこには助けるためのスキルも、命に対する畏れも介さ

ず、正義感や倫理感のみが存在する。しかし、BLS教育による一次救命処置のスキルを習得する学習を積み、児童の命に対する実感が変容するのではないかと考えた。

### 2) 事前アンケート

そこでまず、事前アンケートを行い、BLSスキルを習得する前の児童の実態の把握を行った。アンケートの対象は、第5学年児童120名（3クラス）である。その後、『命のバイスタンダー』の実践を行ったのは、1クラス（40名）である。

アンケート項目は、以下の通りである。

①あなたの目の前で人が倒れていた時、あなたはその人を  
[助ける 助けない]

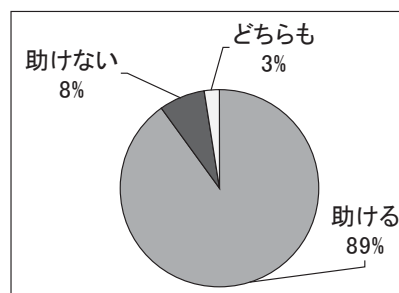
②助けると答えた人は、どのような方法で助けますか。  
[自由記述]

この事前アンケートでは、多くの児童が「助ける」と答えると予想された。そして『命のバイスタンダー』の実践により、「助ける」と自信を持って答える児童が減るという仮説を立てた。その数が減ることは、一見消極的になったような感じを受けるが、知識やスキルのない状態で道徳観のみの考えで自己の意志決定を行うよりも、学習を積んだことによって命の大切さの実感に近づき、命の重さを感じるからこそ、その数は減るだろうという考えである。

## III. 結果

### 1) 事前アンケートの結果

まず、①あなたの目の前で人が倒れていた時、あなたはその人を [助ける 助けない] という質問の結果は、以下のようになった。



以上のように、助けると答えた児童は108名で、予想通りの結果となった。しかし、3名の児童が「助ける・助けない」のどちらの回答も選択していた。このことについて聞き取りをしたところ、「場合による」という回答を得た。場合とは、例えばその傷病者が家族や知人である場合は助けようとするが、見知らぬ人だと近付かないのではないかとということである。

「助ける」と回答した108名の児童に対する②の質問においては、以下のような結果を得た。

助ける方法	回答数
助けを呼ぶ。	88
119番通報をする。	55
「大丈夫ですか?」などと声をかけたり話しかけたりする。	27
AEDを使用する。	8
安全な場所に動かしたり安全な体位を取らせる。	6
心臓マッサージをする。	3
人工呼吸をする。	2
助けることができない理由	回答数
自分には何もできないから。	3
よけいに悪化させてしまうかもしれないから。	3
パニックになってしまうから。	3
見知らぬ人だから。	2

目の前の傷病者を「助ける」と答え、その方法として最も多かったのが「助けを呼ぶ」という理由だった。注目すべきは、「AEDを使用する」「人工呼吸や心臓マッサージを行う」など、一次救命処置を施すという回答数が13を数えたことである。もちろん、児童は、それらが何たるかを知らずに回答している。

これらの結果から読み取れることは、児童は「人を助けたい」という気持ちを持っていること、あるいは、苦しんでいる人が目の前にいたら、助けようとするのが当然であるという、倫理的な思考を持っていることがわかる。この気持はとても大切なものであり、持ち続けてほしいと願う。しかしそこには、現実感が伴っていない。したがって、実感のない倫理感のみが児童を支配しているため、その思いは「実践力」＝「命の大切さの実感」とは言い難い。

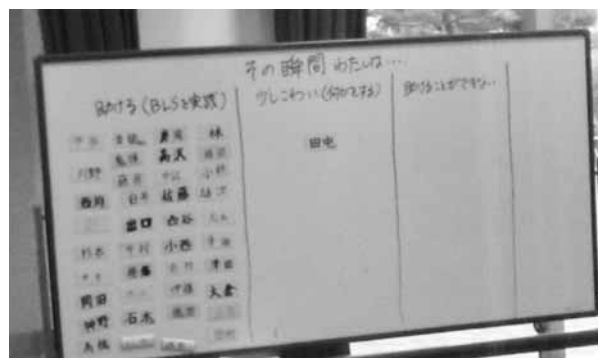
## 2) 授業実践『命のバイスタンダー』における児童の様相

BLSのスキル学習を続けてきた児童は、自分のスキルに自信を持っている様子が伺えた。誇りと言い換えてもいいだろう。児童はスキルを身につけることによって、「人の命を助けることができる」自分に誇りを持つ様子が伝わってきた。

単なるBLSのスキル学習であれば、ここで学習を終える。児童に手作りの「修了証」を渡し、自信を持たせればよい。「命の学習」としても成立するだろう。実際に授業を行っていて感じ、また、児童が毎時間記すワークシートを読んでいると、自信をつけていくと同時に、マネキンに対しても「失敗したらどうしよう」という思いを持ちながら学習している様子が見られた。このことは、児童が単なるスキル学習をしているのではなく、「命」を扱う学習をしているという感覚を持っていることに他ならない。

しかし、「命を扱う学習をしている」という実感と、「命の大切さ」の実感の間には、大きな差異がある。『命のバイスタンダー』の実践の目的は、「命に対する恐れ」を感じ、バイスタンダーとして、「その一歩」を踏み出すことの勇気を実感し、「自分が本当にできること」を考えることができるようになることである。端的に言えば、「思ったほどには何もできない自分」を知り、そんな自分には何ができるのかを、本気で考えさせることにねらいがあった。

本実践は、2008年度大阪教育大学附属池田小学校研究協議会において、公開授業を行った。公開した場面は、児童はBLSスキルを習得し終え、修了証をもらった次時にあたる。授業の前半では、前年度と同様に、グループごとにスキルを確認し合った。そして後半に差し掛かった。今回の公開授業の前日に、児童に対して意識調査を行っていた。「もし目の前に傷病者がいたら、あなたはどうしますか」という質問に対し、「助ける(BLSを実践する)」「少しこわいけど何かをする」「助けることができない」という選択肢で答えさせた。公開授業本時の始めの時点での児童の意識は、資料②の様相を示していた。



＜資料②2008. 2. 20研究協議会公開授業当日の画像より＞

1名の児童以外の39名(男子20名女子20名)が、BLSを使って人命救助に携わりたいという意識を持っていた。いかに自分自身のBLSスキルに自信をつけていたかが伺える。そして授業の中で、児童に、円にならせ、中心にマネキンを置いた。

この直前に、街中で傷病者が倒れていて、そこに人だかりができていた画像を見せ、様々な意見を言わせた。その画像が示す状況を個々が分析しながら意見を言う中で、その場の状況に具体性を持たせるねらいがあった。そして円になった児童に対して「あっ、だれか倒れている!」と、マネキンを指差して叫んだ。参会者の方が時間を計ってくださっていて、後で教えていただいたのだが、児童が身動きできなかった時間は35秒間だったそう。児童にとっては、10分ほどにも感じる長い時間だった。そして、2人の女子児童が、手を取り合ってマネキ



＜資料③2008.2.20研究協議会公開授業当日の画像より＞

ンに駆け寄った。「大丈夫ですか!？」。

そして、一連のBLSを児童は一生懸命にこなし、「ストップ」の声で終了した。一様に、2人の女子児童にも、まわりのどの児童にも、安堵の表情が伺えた。児童全員に前に来させ、今回はワークシートではなく、授業前にホワイトボードの3か所（「助ける・少しこわいけど何かする・助けることができない」）に置いたネームプレートの位置を、今の考えを元に変えても良いことを告げた。

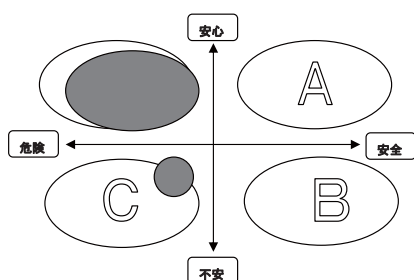
そして動いたネームプレートの位置は、資料③の画像のようになった。

大きく児童の意識が変容したことが伺える。ほとんどの児童が、「少しこわいけど何かする」という位置に置いている。また、境界線に置いている児童の気持ちも多分に理解できる。

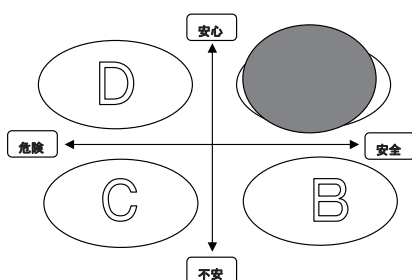
#### IV. 考察

『命のバイスタンダー』の実践における「安全・安心」の様相を、図①を用いて検証したい。

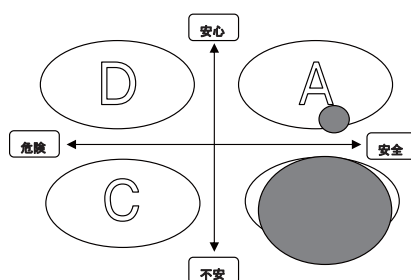
このとき、『命のバイスタンダー』においては、「安全」な状態とは、一次救命処置のスキルを習得し、技能上においては傷病者を助けることができる状態を示し、「安心」は、習得したスキルに自信を持ち、いざというときに自分自身が何をすることができるかを準備できていることを自覚している様相を示すものとする。このことは、取り扱う題材によって変わる。



図Ⅱ [学習初期]



図Ⅲ [学習中期]



図Ⅳ [学習後期]

#### [学習初期]

『命のバイスタンダー』を学習する以前の児童の様相は、図Ⅱの様相を示していた。しかし、ここで言う安心は、無知からくるものであり、学習で、その様相が変容する可能性を大いに秘めた「安心」であり、確固たるものではない。また、数名の児童は「人を助けることができるか。怖いのではないか。」という不安を持っている様相が見られた。

#### [学習中期]

スキル学習を進めていく中で、児童は自身のBLSスキルに自信を持って行く。高学年であれば、大人顔負けのスキルを身につけることができる。その中で児童は、「人の命を助けることができる自分」という自尊感情を高めていく様相が見られた。

#### [学習後期]

授業の最終段階で、児童の大半がネームプレートを「少し怖い」の項目に置いた。このことは、授業の初期段階に比べて「不安」に感じている様子が伺える。しかし、ここでいう不安とは、命を扱うことの怖さや重みを実感したということに他ならない。

最終的には、『命のバイスタンダー』の実践においては「不安」に感じた児童が多い結果になった。これは、『命のバイスタンダー』が命の実感や重さを感じさせることに重点を置いた実践であったからで、他の安全教育においては、また違った様相を見せるだろう。

これら児童の「安全・安心」様相図は、授業者の実感から得たものであり、実証性に欠ける感は否めない。今後安全学習を行っていく上で、児童にこの様相図を毎授業ごとにポイントさせる方法を試行したい。そのデータを集約していくことにより、より効果的な安全教育の礎を築くことができると確信している。

#### 参考文献

- 1) 大阪府警 「子どもを犯罪から守るために」  
<http://www.police.pref.osaka.jp/05bouhan/anzen/taisaku/kodomo/index.html>